

# ここふる学校 かい「こ」育て 解説編 ③

## 1. 養蚕ようさんの歴史 近代の養蚕

江戸時代までは、人々は農業の合間に小規模な養蚕を行うことがほとんどでした。ところが、貞享2年（1685）に江戸幕府じょうきやうが明びやくふからの生糸きいとの輸入を制限したことで国産品の需要が増大し、長野県ながのや東北地方、茨城県いばらきといった地域で盛んに養蚕が行われるようになりました。その後横浜港が開港し、明治時代に入ると、ヨーロッパへの生糸の輸出需要が高まって群馬県ぐんまが一大産地になりました。明治5年（1872）には、生糸の品質向上のために群馬県に富岡製糸場とみおかせいしが作られ、以後生糸は日本の主要輸出産品となり、日本の近代化を支えたのです。

## 2. 大野城市ちくしぐん（旧筑紫郡）の養蚕

### （1）筑紫郡の養蚕の幕開け

筑紫郡の養蚕のはじまりははっきりとはわかっていません。大正13年（1925）に発行された『筑紫郡の蚕業』には、江戸時代に福岡藩士ふくおかはんしの家庭で、自分たちの衣服を作るために養蚕が行われていたのが筑紫郡の養蚕のはじまりではないかと記されています。

その後明治5年（1872）になると、福岡県が報奨金ほうしょうきんを与えて桑苗を育成させ、希望者に原価で配布を行ったため、副業として養蚕ようさんを行う農家が増えていきました。

### （2）養蚕の発展と大規模化

大野城市（当時は大野村）では、養蚕が盛んに行われていました。村に養蚕の専門家を招いて指導を受けたりしたほか、長野県ながのや福島県ふくしまに養蚕を学びに行き、大規模な経営を始める人が出てきました。最初のうちは座繰り製糸ざくせいしといい、人力で歯車を回して糸を巻き取り、生糸が作られていましたが、技術水準は高くなく、輸出用には合いませんでした。このころからカイコを育てて繭をとる養蚕業と、繭

から生糸を作る製糸業の分離が進み、明治の中頃からは太宰府町に鎮西製糸株式会社や太宰府町製糸株式会社が創立され、筑紫郡でも大規模な機械製糸が行われるようになりました。

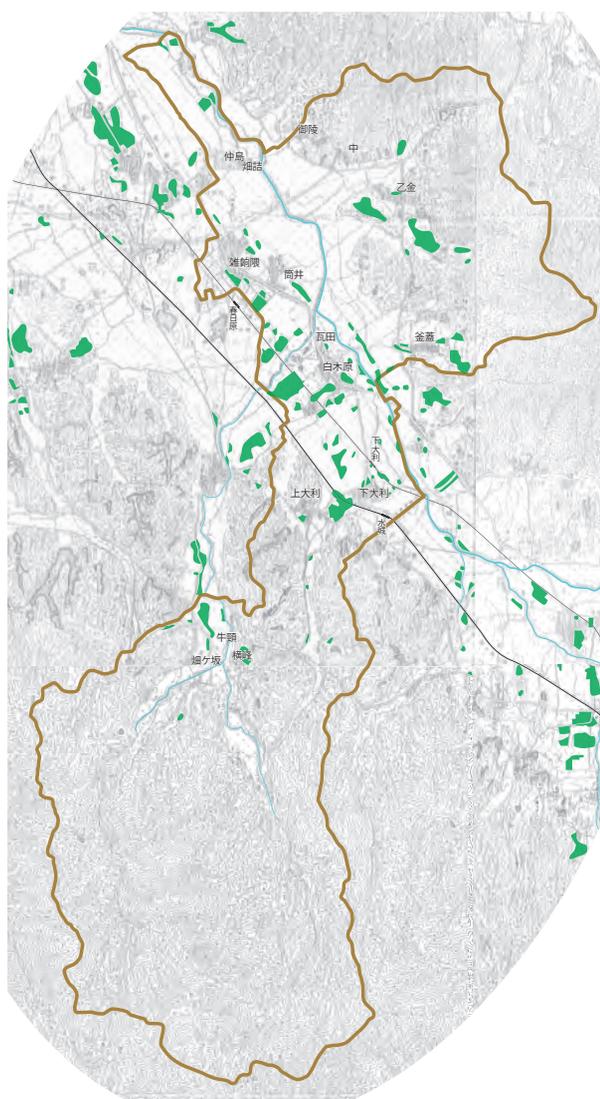
ところが、明治30年頃になると、大量生産を求めるあまり粗悪品が増加、さらにはカイコの病気が流行し、県内の養蚕業は危機に陥りました。そこで、明治31年（1898）福岡県に蚕業技術官が設置され、桑園の改良や病気の予防、品種改良のほか、3齢までの小さなカイコ（稚蚕）の共同飼育や出荷する繭を乾燥させる小型共同乾繭機の設置などを行い、養蚕技術の向上をめざしました。

明治39年（1906）には日本が世界一の生糸生産国となり、筑紫郡でも明治40年（1907）に26ヶ所の共同稚蚕飼育所が開設されるなど、養蚕業はますます発展していきました。

明治の末から大正の初めにかけても、二日市生繭市場や山十組二日市製糸場、雑餉隈生繭市場などが続々と開設され、昭和3年（1928）頃、養蚕業は最盛期を迎えました。大野村では当時農家の約半数が養蚕を行い、市内のあちこちに桑畑が作られました。



筑紫郡の蚕業 (1925年刊行)



大正15年の市内の桑畑（緑色の部分）

そして、昭和4年（1929）には福岡県の蚕業試験場、昭和10年（1935）には繭検定所が今の大野城市役所の場所に建設されました。



福岡県の繭検定所（昭和47年）

### （3）世界<sup>きょうこう</sup>恐慌と養蚕業<sup>ようさんぎょう</sup>の終焉 ところが、昭和4年（1929）

に始まった世界恐慌により、繭や生糸の価格が大暴落します。高いときには繭1貫（3.75kg）で14～5円にもなったものが、昭和5年には2、3円程にまで下落しました。その後価格は回復していきましたが、昭和14年（1939）に第二次世界大戦が始まると、当時生糸の輸出先のほとんどを占めていたアメリカへの輸出が中止され、国内でも徴兵<sup>ちようへい</sup>や牛馬の供出により労働力が減少、また食糧<sup>しょくりょう</sup>生産のために桑畑は畑になり、養蚕を取り巻く環境は悪化していきました。

第二次世界大戦後、戦後復興期や高度経済成長期を経て日本の養蚕業は復興しましたが、安くて便利な化学繊維<sup>せんい</sup>や中国産生糸の台頭により輸出が低迷しました。また、戦後需要の中心であった国内でもライフスタイルの変化により着物が着られなくなったことから、昭和50年代以降、養蚕業は急速に衰退<sup>すいたい</sup>の一途<sup>いっとう</sup>を辿<sup>たど</sup>っていきました。

### （4）現代の養蚕

平成元年（1989）に57,230戸あった養蚕農家は、高齢化などによる後継者不足のため、平成30年（2018）には全国で293戸となり、200分の1近くまで減少しています。繭<sup>まゆ</sup>の生産量も平成元年の26,819 tから110 tにまで減りました。製糸業者や機械の製造会社も少なくなり、日本の養蚕業は厳しい状況が続いています。

一方で、近年では繊維用途以外にカイコを利用をする研究が行わ

れています。化粧品や人工血管などの医療用途のほか、カイコがすぐに大きくなることから宇宙食への利用などが進められています。最近では、九州大学とベンチャー企業によるカイコを使った新型コロナウイルスワクチンの開発もニュースになりました。

現代ではあまり身近ではなくなってしまったカイコですが、私たちのくらしにはこれからも欠かせない存在です。

#### 参考文献

##### 〈書籍〉

新開 孝 2015『ぜんぶわかる！カイコ』ポプラ社

庄治吉之助 1964『近世養蚕業発達史』御茶の水書房

鈴木芳行 2011『蚕にみる明治維新 渋沢栄一と養蚕教師』吉川弘文館

全国養蚕業組合連合会 1934『非常時における養蚕家の覚悟』三秀社

高木賢 2014『日本の蚕糸のものがたり—横浜開港後 150 年波乱万丈の歴史—』大成出版社

高崎経済大学地域科学研修所編 2018『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』

筑紫郡産業組合連合会 1924『筑紫郡の蚕業』

##### 〈官公庁刊行物〉

大野城市 2004『大野城市史 下巻 近代 現代』

春日市 1994『春日市史 中巻 近代・現代 農業水利』

太宰府市 2004『太宰府市史 通史編Ⅲ』

筑紫野市 1999『筑紫野市史 下巻 近世 近現代』

農林省 1940「戦時下の養蚕界」『週報 第 176 号』

福岡県蚕業取締所『蚕業取締事務成績 附参考資料』大正8・12・14・15年、昭和2～15年

##### 〈Webページ〉

2011「ニュースレター “おかいこさま” No19」ナショナルバイオリソースプロジェクト「カイコ」情報誌 平成 23 年 5 月 15 日発行 第 19 号 <http://www.nbrp.jp/index.jsp>

2011「ニュースレター “おかいこさま” No20」ナショナルバイオリソースプロジェクト「カイコ」情報誌 平成 23 年 10 月 15 日発行 第 20 号 <http://www.nbrp.jp/index.jsp>

農林水産省 2019「新蚕業プロジェクト プロジェクト方針 令和元年9月」<https://www.maff.go.jp/j/press/seisan/tokusan/190913.html>